



東北大学

東北大学

担当部署連絡先 研究推進課基盤研究係  
E-mail : kenjyo@grp.tohoku.ac.jp

作成日 : 2024年11月20日  
更新日 : —

科研費  
KAKENHI

## 言語の語順と思考の順序

文学、言語学およびその関連分野

研究者所属・職名 : 文学研究科・教授

ふりがな こいずみ まさとし

氏名 : 小泉 政利

主な採択課題 :

- [基盤研究\(S\)「OS言語からみた「言語の語順」と「思考の順序」に関するフィールド認知脳科学的研究」\(2019-2023\)](#)
- [基盤研究\(A\)「OS言語の談話処理メカニズムに関するフィールド心理言語学的研究」\(2015-2018\)](#)
- [基盤研究\(S\)「OS型言語の文処理メカニズムに関するフィールド言語認知脳科学的研究」\(2010-2014\)](#)

分野 : 言語学、心理学、脳科学

キーワード : 語順選好、マヤ諸語、オーストロネシア語族、脳内言語処理過程、消滅危機言語

## 課題

### ●研究の背景・目的

主語(S)が目的語(O)に先行するSO語順がその逆のOS語順に比べて処理負荷が低く母語話者に好まれる傾向があること(SO語順選好)が多くの研究で報告されている。しかし、従来の文処理研究は日本語や英語のようにSO語順を文法的基本語順にもつSO言語を対象にしているため、SO語順選好が個別言語の基本語順を反映したものなのか、あるいは人間のより普遍的な認知特性を反映したものなのかが分からない。この2種類の要因の影響を峻別するためには、OS語順を基本語順に持つOS言語で検証を行う必要がある。

### ●研究の手法

そこで本研究では、これまで全く研究されてこなかったOS語順を基本語順にもつ少数民族の言語(カクチケル語とタロコ語)の脳内処理過程を、特に「言語の語順」と「思考の順序」との関係に着目して研究し、その結果を日本語や英語の脳内処理過程と比較した。

その際、話者の居住地(グアテマラと台湾)に実験装置を持ち込み、行動実験、視線計測、脳機能計測など多様な手法を駆使して調査・実験を行った(図1)。また、持ち運びのできないMRIなどの大型の装置を使う実験は、話者を日本に招聘して実施した。



図1 グアテマラで実施した脳波実験の様子



東北大学

東北大学

担当部署連絡先 研究推進課基盤研究係  
E-mail : kenjyo@grp.tohoku.ac.jp

作成日 : 2024年11月20日  
更新日 : —

科研費  
KAKENHI

## 言語の語順と思考の順序

文学、言語学およびその関連分野

## 研究成果

### ●どんな成果がでたか？どんな発見があったか？

一連の研究によって、人間の脳内言語処理一般に関して、以下のことが明らかになった。

- (1) 文を話す時に選ばれる語順を決定する主な要因は思考の順序であるのに対して、文を理解する際の処理負荷を決定する主な要因は文法処理の複雑さであり、両者は異なる。
- (2) そのため、話者が好んで用いる語順が、最も分かりやすい語順であるとは限らない。
- (3) 例えば、カクチケル語では、話し手が最も頻繁に用いる他動詞文の語順は「主語・動詞・目的語 (SVO)」(SO語順) であるが、聞き手が最も理解しやすい(処理負荷が低い)語順は「動詞・目的語・主語 (VOS)」(OS語順) である。

### ●プレスリリース

詳しい成果の説明は下記プレスリリースをご覧ください。

<https://www.tohoku.ac.jp/japanese/2023/02/press20230201-01-psycholinguistics.html>

### ●Leonard Bloomfield Book Award 受賞

本研究の一連の成果は国際学術誌に論文として発表した。また、それらを総括した書籍を英国のケンブリッジ大学出版局 (Cambridge University Press) より出版した(図2)。その書籍が米国言語学会 (Linguistic Society of America) の2025年度 Leonard Bloomfield Book Award を受賞した。

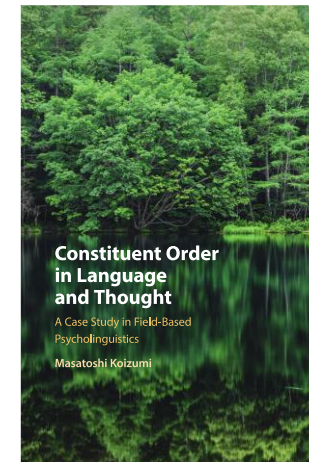


図2 研究成果をまとめた書籍の表紙

## 今後の展望

### ●今後の展望・期待される効果

カクチケル語はグアテマラで話されているマヤ諸語の1つで、タロコ語は台湾で話されているオーストロネシア語族の言語である。どちらもユネスコによって消滅危機言語に指定されている。本研究は、言語や人間性に対する理解を深めるとともに、危機言語に対する関心を高めることによって言語と文化の多様性を維持促進することの重要性の認識を広め、SDGsの目標10に掲げられる「不平等をなくす」ことに貢献することが期待される(図3)。また、異文化間コミュニケーションを促進し、より良い共生社会の実現に貢献することも期待できる。



図3 SDGs目標10